

再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業

公募要領

平成24年12月
環境省地球環境局地球温暖化対策課

環境省では、再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業を行うこととしています。

本事業の概要、対象事業、応募方法及びその他の留意していただきたい点は、この公募要領に記載するとおりですので、応募される方は、公募要領を熟読いただくようお願いいたします。

公募要領目次

1. 事業の目的と性格
2. 公募する事業の対象
3. 補助事業者及び補助事業期間
4. 補助対象事業の選定
5. 応募に当たっての留意事項
6. 応募の方法について
7. その他

補助事業における留意事項等について(必ずお読みください。)

1. 基本的な事項について
2. 補助金の交付について
3. 補助金の経理等について

補助事業における利益等排除について

- ・別紙1 再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業 実施計画書
- ・別紙2 再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業 経費内訳
- ・参考資料 経理的基礎等に関する提出書類

再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業

1. 事業の目的と性格

本事業では、再生可能エネルギー発電設備の新規立地促進・設備容量増加を図ることを目的とします。

本補助金の執行は、法律及び交付要綱等の規定により適正に行っていただく必要があります。「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律」の規定によるほか、この補助金の交付要綱・実施要領に定めるところに従い実施していただきます。万が一、これらの規定が守られず、環境省の指示に従わない場合には、交付要綱の規定に基づき交付決定の取消しの措置をとることもあります。また、事業終了後においても、補助事業の効果が発現していないと判断される場合には、補助金返還などの対応を求められることがありますので、この点について十分ご理解いただいた上で、応募してください。（詳細は p8「補助事業における留意事項等について」をご確認ください。）

- ・ 事業開始は、交付決定日以降となります。
- ・ 事業完了後も、事業報告書（二酸化炭素削減量の把握等）の提出や適正な財産管理、補助事業の表示などが必要です。
- ・ 補助事業で整備した財産を処分（目的外使用、譲渡等）しようとする場合は、あらかじめ環境省に申請を行い、承認を受ける必要があります。
- ・ これらの義務が十分果たされないときは、当省より改善のための指導を行うとともに、事態の重大なものについては交付決定を取り消すこともあります。

2. 公募する事業の対象

(1) 対象事業の要件

複数の各1 MW以上の設備容量を有する太陽光発電施設又は風力発電施設を一体的に管理するために、出力1 MW以上の蓄電池を導入する事業であり、以下の要件をすべて満たすもの。

ア 複数の発電施設とは、種類や設置状況等が異なることで発電出力パターンが複数となり、一体的に管理することにより、一定の出力平滑化効果が期待出来るものをいう。

イ 本事業と一体的に運用を行う「平成24年度蓄電池による再生可能エネルギー出力安定化効果検証委託業務」に情報提供やその他必要な協力ができるもの。

ウ 接続対象となる再生可能エネルギー及び補助対象となる蓄電池並びにその接続に要する電線の設置にあたり、各種法令の許可等（予定含む。）を得ているもの。

3. 補助事業者及び補助事業期間、補助率

(1) 補助金の交付を申請できる者（補助事業者）は、以下のとおりとします。

ア) 民間企業

イ) 独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）第2条第1項に規定する独立行政法人

ウ) 特例民法法人並びに一般社団法人・一般財団法人及び公益社団法人・公益財団法人

エ) 法律により直接設立された法人

オ) その他環境大臣が適当と認める者

(2) 補助事業の年数は原則として単年度とします（平成25年3月31日まで）。

(3) 補助率は1/2を上限とします。

4. 補助対象事業の選定

(1) 一般公募を行い、選定します。

(2) 応募者より提出された実施計画書等をもとに厳正に審査を行い、以下の項目を総合的に評価し、優れた提案について予算の範囲内で補助事業者を選定します。

事業の実施体制が確実であること。

事業を確実に実施できる経理的基礎を有すること、又は事業実施のために必要な資金調達に係る確実な計画を有していること。

経済性・効率性（費用対効果等）が高く、事業性が見込まれること。

なお、応募要件を満たす提案であっても、提案内容によっては、補助額を減額又は不採択とする場合もありますのでご了承ください。審査結果に対するご意見は対応致しかねます。

5. 応募に当たっての留意事項

(1) 補助対象経費について

事業を行うために直接必要な以下の経費が補助対象経費であり、当該事業で使用されたことを証明できるものに限り（別紙参照）。

< 補助対象経費の範囲 >

事業を行うために必要な本工事費、付帯工事費、機械器具費、測量及び試験費及び事務費並びにその他必要な経費で環境大臣が承認した経費

(2) 維持管理

導入した設備は、設備所有者又は設備管理者の責任の下で適切な維持管理が講じられるものであること。また、導入に関する各種法令を遵守すること。

(3) 温室効果ガス排出削減量の把握及び情報提供

事業実施者は、事業の実施による温室効果ガスの排出削減量を把握し、環境省の求めに応じて、事業の実施に係るこれらの情報を提供すること。

(4) 事業報告書及び評価報告書の作成及び提出

事業実施者は、補助事業に係る設備の使用開始の日からその年度末まで、及びその後の3年間の期間について、事業の概要及び事業による温室効果ガスの排出削減量、その他の効果、影響等を毎年度取りまとめた事業報告書を作成し、当該年度の翌年度の4月末までに提出すること。

また、事業実施者は、3年間の期間終了後には、当該事業の費用対効果、当該事業以外に事業実施者が他の施設等において蓄電池を導入するなど水平展開の実績及び今後の見込み等を取りまとめた評価報告書を作成し、翌年度の4月末までに提出すること。

6. 応募の方法について

(1) 応募書類の書式(応募様式)について

応募に当たり提出が必要となる書類は、「再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業実施計画【別紙1】」及び「再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業に要する経費内訳【別紙2】」とします。必ず、添付資料の様式に従って作成してください。

応募書類の作成に当たっては、必ず、以下の電子ファイルをダウンロードして作成するようお願いいたします。

【別紙1】再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業実施計画(Excel(.xlsx)形式)

【別紙2】再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業に要する経費内訳(Excel(.xlsx)形式)

別紙1実施計画書については**補助要件を確認できる書類(図面)等**を、別紙2経費内訳については、**金額の根拠がわかる書類(見積書)等**を、参考資料として必ず添付して下さい。

また、4.(2)の経理的基礎に関し、直近の2決算期の貸借対照表及び損益計算書を添付してください。

法人設立時期の関係で2期分の決算書が存在しない場合には、直近期の試算表及び1期分の決算書などを提出してください。

「【別添1】経理的基礎等に関する提出書類」に従い、要件を満たさない場合は各ケースに応じて追加資料を添付してください。

(2) 応募書類の提出方法について

提出方法

ア 電子メールが使用できる環境の場合

応募様式を、電子メールの添付ファイルとして、以下の送信先アドレスあてに送信すること。

電子メールの送信先アドレス：chikyu-ondanka@env.go.jp

メール件名（題名）と添付ファイル名は次のとおりとする。

- ・メール件名：「再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業の応募」
- ・添付ファイル名：「(様式1)申請者名(例： 株式会社).xlsx」及び「(様式2)申請者名.xlsx」

添付ファイルの作成・保存に関する注意

- ・応募書類一式を、ダウンロードしたファイルに対応したアプリケーションで作成し、それぞれを一連の電子ファイルとして送信すること。ダウンロード時に一つのファイルとなっている応募書類を複数のファイルに分割して送信した場合、その後の扱い（様式の一部欠損等）に関し、当方は責任を持たない。
- ・電子ファイルを作成するアプリケーションソフトによる保存形式は、ワード 2010 以下及びエクセル 2010 以下のバージョン形式とすること。
- ・使用するフォントについては、一般的に用いられないものを使用しないこと。
- ・添付ファイルは自動解凍ファイル等、圧縮ファイルとせずに、電子ファイルの容量自体を極力小さくするような工夫をすること。特に図表等を挿入する場合は、十分注意すること。
- ・当該電子ファイルにマクロ等の機能を付与しないこと。このようなファイルは速やかに破棄・削除し、本業務の選定対象外とすることがある。
- ・Windows 以外のパソコンで書類を作成した場合、必ず Windows マシンでファイルを展開できることを確認の上、提出すること。ダウンロードしたワード又はエクセルの様式を－太郎その他のソフトに変換して提出した場合及び当方の Windows マシンで展開できない状態で送付した場合は受理できないので注意すること。
- ・当方のメールサーバーの制約から、メール容量が 5 MB を超える場合は受け取れないことがある。ファイルの分割等により、添付ファイルを含むメール容量が 5 MB 以下になるようにすること。

受領の確認

当方で受領を確認した場合、受領したメールをそのまま返信します。当方へ送信後、2 営業日程度しても返信がない場合、当方にうまく送受信されていない可能性があります。電話にてお問い合わせください（電話番号は末尾参照）。

イ 電子メールが使用できない環境の場合（できる限り電子メールを御使用ください）

電子メールを送信することができない環境の場合は、応募様式ファイルを保存した CD-ROM と、打ち出したものを 1 部同封の上、送付してください。

送付先の住所： 〒100-0013 東京都千代田区霞が関 1-4-2 大同生命霞が関ビル 17 階
あて先は「環境省地球環境局地球温暖化対策課 再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業担当」としてください。

電話番号：TEL03-3581-3351(内線 6780)

封筒等の表に、必ず、赤字で「再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業応募書類在中」と記してください。

電子ファイルの名前、形式等、ファイル作成上の注意は、上記アの場合と同じです。

受領の確認

提案書類に記された Fax 番号あて、受領した旨を Fax します。当方へ送付後、1 週間程度しても受領確認の Fax 等がない場合、送付過程でのトラブルが考えられます。電話にてお問い合わせください（電話番号は末尾参照）。

提出いただいたファイル等について

提出いただいたファイル等は、返還しません。

応募書類の受付期間について

平成24年12月25日(火)～平成25年1月15日(火)17時必着

受付期間以降に当方に到着した書類のうち、遅延が当方の事情に起因しない場合は、応募を受け付けません。応募状況に応じ、予算配分が可能な場合には、追加公募を行います。

7. その他

公募全般に対する問い合わせは、極力、電子メールにてお願いします。ただし、提案事業の提出メールとの区別を容易にするため、電子メールの件名（題名）は「再生可能エネルギー出力安定化のための蓄電池導入補助事業公募問い合わせ」としていただきますようお願いします。

< 担 当 >

〒100-0013 東京都千代田区霞が関1-4-2
大同生命霞が関ビル17階
環境省地球環境局地球温暖化対策課
TEL 03-3581-3351(6780)
FAX 03-3580-1382
chikyu-ondanka@env.go.jp

補助事業における留意事項等について

1. 基本的な事項について

本補助金の交付については、予算の範囲内で交付するものとし、「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律」の規定によるほか、この補助金の交付要綱に定めるところによることとします。万が一、これら規定が守られない場合には、事業の中止、補助金返還などの措置がとられることがありますので、制度について十分ご理解いただいた後、応募してください。

2. 補助金の交付について

(1) 交付申請

公募により選定された補助事業者には補助金の交付申請書を提出していただきます（申請手続等は交付要綱を参照願います。）。その際、補助の対象となる費用は、当該年度に行われる事業で、かつ当該年度中に支払いが完了するものとなります。

なお、消費税等相当額があり、かつ、その金額が明らかな場合は、これを減額して交付申請額を算出してください。

(2) 交付決定

環境省は、提出された交付申請書の内容について以下の事項等に留意しつつ審査を行い、補助金の交付が適当と認められたものについて交付の決定を行います。

- ・申請に係る補助事業の全体計画（資金調達計画、工事計画等）が整っており、準備が確実に行われていること。
- ・補助対象経費には、国からの他の補助金（負担金、利子補給金並びに補助金に係る予算の執行の適正化に関する法律第2条第4項第1号に掲げる給付金及び同項第2号に掲げる資金を含む。）の対象経費を含まないこと。

(3) 事業の開始

補助事業者は環境省からの交付決定を受けた後に、事業開始することとなります（なお、工期等の諸事情により早期開始が必要なものについてはご相談ください。）。

補助事業者が他の事業者等と委託等の契約を締結するにあたり注意していただきたい主な点（原則）を以下に記します。

- ・新規応募事業の場合、契約・発注日は環境省の交付決定日以降であること。
- ・補助事業の遂行上著しく困難又は不相当である場合を除き、競争原理が働くような手続きによって相手先を決定すること。
- ・当該年度に行われた委託等に対して当該年度中（出納整理期を含む。）に対価の支払い及び精算が行われること。

(4) その他

上記の他、必要な事項は交付要綱に定めますので、これを参照してください。

3．補助金の経理等について

(1)補助金の経理等について

補助事業の経費については、帳簿及びその他証拠書類を備え他の経理と明確に区分して経理し、常にその収支状況を明らかにしておく必要があります。

これらの帳簿及び証拠書類は、補助事業の完了の日の属する年度の終了後5年間、いつでも閲覧に供せるよう保存しておく必要があります。

(2)実績報告及び書類審査等

当該年度の補助事業が完了した場合は、事業終了後30日以内あるいは翌年度4月10日のいずれか早い日までに実績報告書を環境省宛て提出していただきます。

環境省は事業者から実績報告書が提出されたときは、書類審査及び必要に応じて現地検査等を行い、事業の成果が交付決定の内容に適合すると認めるときは、交付すべき補助金の額を決定し、補助事業者に確定通知をします。

なお、自社調達及び100%同一資本に属するグループ企業からの調達によってなされた設計、工事、物品購入等については、原価計算により利益相当分を排除した額（製造原価）を補助対象経費の実績額とします。また関係会社からの調達分についても原則原価計算等により、利益相当分を排除した額（製造原価と販売費及び一般管理費の合計）を補助対象経費の実績額とします（詳細はp13「補助事業における利益等排除について」参照）。

(3)補助金の支払い

補助事業者は、環境省から確定通知を受けた後、精算払い請求書を提出していただきます。その後環境省から補助金を支払います。

(4)取得財産の管理について

補助事業の実施により取得した財産（取得財産等）については取得財産管理台帳を整備し、その管理状況を明らかにしておくとともに、財産を処分（補助金の交付の目的（補助金交付申請書及び実施計画書に記載された補助事業の目的及び内容）に反して使用し、譲渡し、交換し、貸し付け、又は担保に供することをいう）しようとするときは、あらかじめ環境省の承認を受ける必要があります。その際、場合によっては補助金の返還が必要になることがあります。なお、補助事業により整備された施設、機械、器具、備品その他の財産には、環境省補助事業である旨を明示しなければなりません。

(5)その他

上記の他、必要な事項は交付要綱に定めますので、これを参照してください。

1 区 分	2 費 目	3 細 目	4 内 容
工事費	本工事費	(直接工事費) 材料費 労務費 直接経費 (間接工事費) 共通仮設費 現場管理費	<p>事業を行うために直接必要な材料の購入費をいい、これに要する運搬費、保管料を含むものとする。この材料単価は、建設物価（建設物価調査会編）、積算資料（経済調査会編）等を参考のうえ、事業の実施の時期、地域の実態及び他事業との関連を考慮して事業実施可能な単価とし、根拠となる資料を添付すること。</p> <p>本工事に直接必要な労務者に対する賃金等の人件費をいう。この労務単価は、毎年度農林水産、国土交通の2省が協議して決定した「公共工事設計労務単価表」を準用し、事業の実施の時期、地域の実態及び他事業との関連を考慮して、事業実施可能な単価とし、根拠となる資料を添付すること。</p> <p>事業を行うために直接必要とする経費であり、次の費用をいう。 特許権使用料（契約に基づき使用する特許の使用料及び派出する技術者等に要する費用）、 水道、光熱、電力料（事業を行うために必要な電力電灯使用料及び用水使用料）、 機械経費（事業を行うために必要な機械の使用に要する経費（材料費、労務費を除く。））</p> <p>次の費用をいう。 事業を行うために直接必要な機械器具等の運搬、移動に要する費用、 準備、後片付け整地等に要する費用、 機械の設置撤去及び仮道布設現道補修等に要する費用、 技術管理に要する費用、 交通の管理、安全施設に要する費用</p> <p>請負業者が事業を行うために直接必要な現場経費であって、労務管理費、水道光熱費、消耗品費、通信交通費その他に要する費用をいい、類似</p>

1 区 分	2 費 目	3 細 目	4 内 容												
事務費	事務費	一般管理費	<p>の事業を参考に決定する。</p> <p>請負業者が事業を行うために直接必要な法定福利費、修繕維持費、事務用品費、通信交通費をいい、類似の事業を参考に決定する。</p> <p>本工事費に付随する直接必要な工事に要する必要最小限度の範囲で、経費の算定方法は本工事費に準じて算定すること。</p> <p>事業を行うために直接必要な建築用、小運搬用その他工事用機械器具の購入、借料、運搬、据付け、撤去、修繕及び製作に要する経費をいう。</p> <p>事業を行うために直接必要な調査、測量、基本設計、実施設計、工事監理及び試験に要する経費をいう。また、補助事業者が直接、調査、測量、基本設計、実施設計、工事監理及び試験を行う場合においてこれに要する材料費、労務費、労務者保険料等の費用をいい、請負又は委託により調査、測量、基本設計、実施設計、工事監理及び試験を施工する場合には請負費又は委託料の費用をいう。</p> <p>事業を行うために直接必要な事務に要する共済費、賃金、旅費、需用費、役務費、委託料、使用料及賃借料及び備品購入費をいい、内容については別表に定めるものとする。</p> <p>事務費は、工事費の金額に対し、次の表の区分毎に定められた率を乗じて得られた額の合計額の範囲内とする。</p>												
			付帯工事費												
			機械器具費												
			測量及試験費												
			事務費												
			<table border="1"> <thead> <tr> <th>号</th> <th>区 分</th> <th>率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>5,000万円以下の金額に対して</td> <td>6 . 5 %</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>5,000万円を超え 1 億円以下の金額に対して</td> <td>5 . 5 %</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>1 億円を超える金額に対して</td> <td>4 . 5 %</td> </tr> </tbody> </table>	号	区 分	率	1	5,000万円以下の金額に対して	6 . 5 %	2	5,000万円を超え 1 億円以下の金額に対して	5 . 5 %	3	1 億円を超える金額に対して	4 . 5 %
号	区 分	率													
1	5,000万円以下の金額に対して	6 . 5 %													
2	5,000万円を超え 1 億円以下の金額に対して	5 . 5 %													
3	1 億円を超える金額に対して	4 . 5 %													

別表

1 区分	2 費 目	3 細 目	4 細 分	5 内 容
事務費	事務費	共済費	社会保険料	この費目から支弁される労務者に対する共済組合負担金と事業主負担保険料をいい、用途目的、人数、単価及び金額がわかる資料を添付すること。
		賃金		この費目から支弁される事務手続きのために必要な労務者に対する給与をいい、雇用目的、内容、人数、単価、日数及び金額がわかる資料を添付すること。
		旅費		この費目から支弁される事務手続きのために必要な交通移動に係る経費をいい、目的、人数、単価、回数及び金額がわかる資料を添付すること。
		需用費	印刷製本費	この費目から支弁される事務手続きに必要な設計用紙等印刷、写真焼付及び図面焼増等に係る経費をいう。
		役務費	通信運搬費	この費目から支弁される事務手続きのために必要な郵便料等通信費をいう。
		委託料		この費目から支弁される業務の一部を外注する場合に発生する特殊な技能又は資格を必要とする業務に要する経費をいう。
		使用料及賃借料		この費目から支弁される事務手続きのために必要な会議に係る会場使用料（借料）をいう。
		備品購入費		この費目から支弁される事務用品類、参考図書、現場用作業衣等雑具類の購入のために必要な経費をいい、品目、単価、数量及び金額がわかる資料を添付すること。

補助事業における利益等排除について

補助事業において、補助対象経費の中に補助事業者の自社製品の調達又は関係会社からの調達分（工事を含む。）がある場合、補助対象事業の実績額の中に補助事業者の利益等相当分が含まれることは、調達先の選定方法如何に関わらず、補助金交付の目的上ふさわしくないと考えられます。

そこで補助事業においても今後の検査業務等に資することを目的として、下記のとおり利益等排除方法を定めます。

記

1. 利益等排除の対象となる調達先

補助事業者（間接補助事業者を含む。以下同じ。）が以下の（１）～（３）の関係にある会社から調達を受ける場合（他の会社を経由した場合、いわゆる下請会社の場合も含む。）は、利益等排除の対象とします。

利益等排除の対象範囲には、財務諸表等規則第８条で定義されている親会社、子会社、関連会社及び関係会社を用います。

- （１）補助事業者自身
- （２）１００％同一の資本に属するグループ企業
- （３）補助事業者の関係会社（上記（２）を除く）

2. 利益等排除の方法

(1) 補助事業者の自社調達の場合

原価をもって補助対象額とします。この場合の原価とは、当該調達品の製造原価をいいます。

(2) 100％同一の資本に属するグループ企業からの調達の場合

取引価格が当該調達品の製造原価以内であると証明できる場合は、取引価格をもって補助対象額とします。これによりがたい場合は、調達先の直近年度の決算報告（単独の損益計算書）における売上高に対する売上総利益の割合（以下「売上総利益率」といい、売上総利益率がマイナスの場合は０とします。）をもって取引価格から利益相当額の排除を行います。

(3) 補助事業者の関係会社(上記(2)を除く。)からの調達の場合

取引価格が製造原価と当該調達品に対する経費等の販売費及び一般管理費との合計以内であると証明できる場合、取引価格をもって補助対象額とします。これによりがたい場合は、調達先の直近年度の決算報告（単独の損益計算書）における売上高に対する営業利益の割合（以下「営業利益率」といい、営業利益率がマイナスの場合は０とします。）をもって取引価格から利益相当額の排除を行います。

注）「製造原価」及び「販売費及び一般管理費」については、それが当該調達品に対する経費であることを証明して頂きます。また、その根拠となる資料を提出して頂きます。